

SDGs × 東北 未来へ 動く

私たちが安心して生きられる地球を未来にどう渡していくかが、今ほど問われている時はない。問題意識を持ち、想像力を働かせて身近な暮らしや企業活動を見直す動きが広がっている。切り口となる国連の持続的な開発目標(SDGs)は、2022年の東北にとっても大切なキーワードになる。地域や学校、ビジネスの現場で始まった模索と実践を追った。(8回続き)

古布再利用

使われなくなったタオルやTシャツがA4サイズに切りそろえられている。布は束一つで約1キ。障害者が裁断した物だ。盛岡市の川上塗装工業は、布を有効活用しながら福祉作業所の仕事を生む「リンクアップエス」に取り組む。

塗装作業の仕上げなどで使うウエス(工業用の布)は年間約30キに上る。以前は購入したり、子ども服を再利用したりして確保していた。ある時、川上(専務39)は福祉作業所の仕事が減っているという知人の話を聞いてひらめいた。

「不用な布を集めて裁断してもらえば、障害者の仕事は

異業種と協働 仕事創出

① 川上塗装工業 (盛岡市)

増えるし、会社にとっても節約になる」

昨年3月、チラシで布を募り始めた。反響は大きく、9カ月で延べ170人から計約760キの布が届いた。送り主は親の遺品整理や「終活」で衣服を処分する高齢の女性が多く、岐阜や滋賀など県外からの寄付もあった。使い切れない分は販売し、売り上げの一部はインドの綿農家の救済活動に寄付する予定だ。

川上秀郎社長(43)は10代から板金業など約20の仕事を経験してきた。転職は23歳。交通事故に遭い、半年間にわたった入院生活で人生を省みた。「自分は何をやってきたんだろう」。人の役に立ち地域に貢献したいと、自分で事業を始めると決意した。

手元にあったのは、彼女に



福祉作業所が手掛けたウエスを手にする川上秀郎社長(左)と専務(右)。盛岡市の川上塗装工業(右)ソノツツキで開催された引きこもりを生まない社会を考えるトークイベント(2021年11月)川上塗装工業提供

借りた60万円。元勤務先の社長から譲り受けたトラック1台を足掛かりに、アパートの1室で塗装業を始めた。経営をゼロから勉強し、従業員は15人に増えた。彼女は妻となり、専務として会社を支えてくれている。

多様な学び

3人の子育てをしながら、子どもたちが笑って過ごせる地域にしたいと、思いを強めた。「暮らし続けたいと思える街を創造し、未来につなぐます」。13年に掲げた経営理念は、意図せずSDGsにつながるものとなった。

19年にはドイツなどを視察し、持続可能性を考えた建築やまちづくりの在り方も学んできた。本業で目標を達成することに力を入れ、断熱効果



(盛岡総局・石沢成美)

SDGs

国連が掲げる2030年までの国際的な行動目標。15年の国連サミットで採択された。「誰一人取り残さない」を基本理念に、環境破壊や人権侵害をなくし全ての人が豊かに暮らす世界の実現を目指す。貧困や飢餓の廃絶、水資源、ジェンダー平等、環境保全、地球温暖化関連など17の目標が掲げられている。

8 働きがいも経済成長も



17 パートナースhipで目標を達成しよう

